思春期の身体的変化に伴う経験の様相
－発現タイミング，他者からのフィードバック，身体変化の受容と性差との関連－

高　村　和　代

The aspect of pubertal development : The relationship with timing, feedback from others, acceptance of puberty, and sex differences.

Kazuyo TAKAMURA

Abstract

本研究の目的は，第二次性徴による身体的変化に関わる体験について，発現のタイミングと性別による違いを明らかにすることである。大学生を対象に，第二次性徴を迎えたタイミング，当時の身体的変化に対する受容，身体的変化に対する他者からのフィードバックについての質問紙調査を行った。有効回答数は，男性128名，女性241名の計369名であった。第二次性徴の発現タイミングを要因とした身体的変化の受容について，１要因の分散分析を行った。その結果，男女ともに早熟群は他の群よりも身体的受容が難しいことが明らかになった。また身体的変化に対する対人的フィードバックについて，性別×タイミングの２要因の分散分析を行った結果，女子は早熟なほどフィードバックを多く受けており，男子は逆に早熟なほど対人的フィードバックの経験が少ないことが明らかになった。

Key words

第二次性徴　発現タイミング　他者からのフィードバック　身体変化の受容

問題と目的

第二次性徴を迎える思春期は，男性ホルモンや女性ホルモンの発生にともない，身体の変化が非常に激しい時期である。第二次性徴による身体変化は，男性は髭や体毛など発毛，変声，精通など，女性は乳房の発達や体毛の発毛や初潮を迎えるといった生殖機能に関わる身体変化と，思春期スパートと言われる急激な身長の伸びによって特徴づけられる。そしてこのような劇的な身体変化に直面する思春期の子供たちは，変化していく自分の身体を受容しきれず精神的に混乱することから，不登校や非行などの問題行動にみられる不適応行動や，精神的健康に影響を及ぼすことがこれまでの研究で示されてきている（Paikkoff＆Brooks-Gunn, 1990)。

一般に第二次性徴による身体変化は，女性が10歳から14歳頃に発現し，男性は女性から２年ほど遅れた12歳から14歳頃に発現するとされている。また第二次性徴の発現時期や身体的変化の程度には大きな個人差がみられる。これら発現の個人差は他者と自己の身体的発達の違いを強く意

※　takamura@gifu.shotoku.ac.jp

識化する機会となるため，他者と自己を比較することが多くなり自己評価にも大きな影響を及ぼすことが考えられる。このことから，思春期の身体的変化に伴う精神的混乱や問題行動は，個人内の身体的変化によって引き起こされるよりもむしろ，他者との比較による要因が大きいことが考えられる。そのため，思春期の身体変化研究においては，発現の時期の違いにより他者との違いを意識することにより引き起こされるという発現タイミングの重要性が指摘されている（Brooks-Gunn, et.al., 1985：向井，2015；上長，2007；上長・齊藤，2011）。そのような流れにおいて，齊藤（1985）はこれまでの先行研究を基に，早熟者と晩熟者の特徴をまとめている。その中で研究者により結果にばらつきはあるものの，男子の早熟者は晩熟者に比べて自信がありリーダーになりやすいといった肯定的な特徴の記述が多いのに対し，女子の早熟者は社会性が低く自信がないといった否定的な記述が多いことが示されている。このような性差が見られる背景としては，男性は筋肉が増大して逞しい身体へと変化していくことで，理想的なボディイメージが得られる（Blyth ら，1981）のに対し，女性の身体的変化は細いボディイメージが理想とされる社会背景において，皮下脂肪の増大などの身体変化は否定的なイメージを伴うものである（上長・齊藤，2009；浦上・小島・沢宮，2015など）ため，女子は早熟者の方がより自己の身体を受容しづらいことが考えられる。また上長（2007）は，発現タイミングと身体満足度の相関において，男子は正の相関がみられたのに対し女子は負の相関がみられたと報告している。このように，身体変化に対して男性は肯定的で受容されやすいのに対し，女性は否定的に捉える傾向があることが推測される。

また，第二次性徴での身体変化は先にも述べたように女子は男子に先行して発現する。そのため，早熟な女子は他の同じ歳の子供たちとの身体的な違いが顕著となるため，他者から好奇の目にさらされやすくなる。それゆえ，他者からからかわれたり，他者の目が気になるなど，身体変化に伴い他者からのフィードバックを受けることが多くなることが考えられる。上長（2007）は，思春期の公的自己意識を媒介した発現タイミングと抑うつ傾向との関連についての検討を試みている。この研究において，タイミングと抑うつとの関連は見いだされたが，タイミングと公的自己意識との関連は見いだされなかった。上長（2007）はこの結果の要因として，タイミングと公的自己意識の間に，身体に対するからかいのような自己像のフィードバックが媒介している可能性を示唆している。思春期は第二次性徴に伴う身体的変化に限らず，あらゆる場面において他者からの視線を過剰に意識する特徴が指摘されており，またその特徴は特に女子に多く見られるとされている（梶田，1980）。思春期はこのように過剰に他者の視線が気になる時期である上に，早熟な女子は身体変化によって周囲との違いが顕著になることから，より他者からのフィードバックを意識するのではないかと推測される。それに対し男子は，すでに女子が第二次性徴を迎えているなかで第二次性徴を迎えることから，女子に比べて身体変化に対する構えができている可能性が考えられるため，他者からのフィードバックは女子に比べて意識化されないのではないかと考えられる。このような背景から，身体変化に対する他者からのフィードバックは発現タイミングにより差異が見られ，また男女によって第二次性徴の発現タイミングと他者からのフィードバックの様相が異なることが推測される。

以上から，本研究では発現タイミングと身体変化の受容との関連についての性差を検討することを第一の目的とする。仮説としては，女子は男子に比べて否定的イメージを伴う身体的変化が生じるため，身体的変化の受容は全体的に男子より低いことが予想される。また，女子は男子よりも第二次性徴の発現タイミングが早いため，早熟な女子は周囲の友人と異なる自分を意識する

ことになる。そのため，早熟な女子ほど身体的受容が低く，晩熟になるほど身体的受容が高くなることが予想される。対して男子は筋肉の増大のような肯定的なイメージを伴う身体的変化が生じるため，早熟な男子ほど身体的変化に受容的であると予想される。

さらに第二の目的として，対人的フィードバックと発現タイミングと性別との関連について検討する。仮説としては，早熟な女子は周囲との違いが顕著となることから，対人的フィードバックを多く経験することが予想される。対して男子は晩熟なほど他の子供たちとの違いが顕著になるため，対人的フィードバックの経験が多くなると予想される。

方法

調 査 対 象：岐阜県下および愛知県下の大学生412名（男子145名，女子267名），平均年齢は19.85歳（18歳～25歳）であった。また客観的タイミング以外に欠損値がなかった有効回答者数は369名（男性128名，女性241名）であった。

調 査 時 期：2017年７月

手　続　き：大学の講義時間の一部を利用し質問紙を配布し回収を行った。

調査内容

（１）タイミング　客観的タイミングを測定するため，身体的変化として印象の強いものとして，男性は「ひげが生え始めた時期」，女性は「初潮を迎えた時期」がいつ頃だったかを，学年で回答を求めた。また主観的タイミングは，第二次性徴を迎えた時期は周りの人と比較してどう感じていたかを，「遅かった」～「早かった」の５段階評定で回答を求めた。

（２）対人的フィードバック　項目を選定するために，予備調査として36名（男性13名，女性23名）から「第二次性徴についての思い出」について自由記述を求めた。その回答の人から受けたフィードバックに関する記述から，「からかい」や「人目が気になる」などの否定的意味を含んだ内容と「羨ましがられる」「喜ばれる」などの肯定的な意味を含んだ内容を抽出し，第二次性徴の時に周囲の人々からどのようなフィードバックの体験をしたかについて10項目からなる尺度を作成し，「１．経験していない～５．経験した」の５段階評定で回答を求めた。

（３）身体変化の受容　第二次性徴で身体変化が起きたときの感情を測定するため，上長（2007）を参考に，男性は「声変わり」「発毛」「筋肉がついてきた」「精通」の４項目，女性は「胸がふくらんできた」「発毛」「皮下脂肪がついてきた」「初潮」の4項目について，「１．嫌だった，２．どちらかといえば嫌だった，３．どちらでもない，４．どちらかといえばうれしかった，５．うれしかった」の５段階評定で回答を求めた。

分析ソフト：分析はSPSS ver.23.0を用いて行われた。

倫理的配慮：実施前に調査内容および分析方法，調査協力をすることで生じる危険性がないこと，調査協力は任意であり協力をしなくても不利益を被ることは一切ないこと，個人情報の保護のため無記名で行うこと，回収した調査用紙の保管方法についての説明を口頭で行った。また，調査内容および分析方法の説明については書面によっても行った。

結果と考察

1．尺度の検討

（1）対人的フィードバック尺度

対人的フィードバック尺度の10項目について各項目の平均値および標準偏差を算出したところ，1項目に天井効果，1項目に床効果がみられたため，その項目を排除したのち因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。スクリープロット及び解釈可能性を考慮した結果，1因子解を採用した。その後α係数を算出して内的整合性を検討したところ，1項を削除することでα係数が最も高くなった（α=.885）ことから，7項目を対人的フィードバック尺度として用いることとする。因子分析の結果をTable 1に示す。

Table 1．他者からのフィードバック尺度の因子分析結果

項目	因子負荷量
10.友だちから心配されたこと	.844
3.友だちからからかわれたこと	.750
8.友だちから羨ましがられたこと	.737
1.親から心配されたこと	.737
4.親から喜ばれたこと	.731
9.友だちを羨ましいと思ったこと	.689
5.周りの人と違うことが気になったこと	.577

本研究では，肯定的フィードバックと否定的フィードバックの2因子を想定して尺度を作成したが，1因子構造となった。この結果より，肯定的もしくは否定的フィードバックを独立的に経験しているというよりも，両側面を同時に経験している様子がうかがえる。また，「周りの目が気になったこと」の項目については男女ともに高い得点を示し天井効果がみられたため削除されたが，これまで女子の方が他者からの目を過剰に意識する傾向がみられるという見解（梶田，1980）とは反する結果となった。この結果より，第二次性徴の伴う身体変化に関していえば，男子でも他者からの目を非常に気にする傾向があることが示唆された。

2．発現タイミング，他者からのフィードバック，身体変化の受容についての性差の検討

（1）第二次性徴の発現タイミング

まず主観的タイミングを「遅かった」「どちらかといえば遅かった」と回答した者を晩熟群，「どちらでもない」を平均群，「どちらかといえば早かった」「早かった」を早熟群に分類した。客観的タイミングと3群に分類した主観的タイミングのクロス表をTable 2，Table 3に示す。客観的タイミングの最頻は，男性が高1（23件），女性が小5（54件）であった。一般的に男性の第二次性徴の発現年齢が12歳から14歳頃，女性が10歳から14歳頃とされているが，本研究においても同様の結果が示された。男女によって主観的タイミングのばらつきに違いがあるかを確認するため，χ^2検定を行った結果，χ^2=4.495（n.s.）であり，性差はみられなかった。なお，本研究の有効回答者のうち客観的タイミングに欠損値があったものは66件（17.9%）であった。これは大学生に当時のことを思い出して回答してもらっていたため，記憶が曖昧で答えられなかった被験者が多かったことが推測される。このことから，客観的タイミングについては回答の信頼性が担保できていない可能性があるため，今後の分析では主観的タイミングのみを扱うこととする。

Table 2．客観的タイミング と 早さ認知 のクロス表（男子）

		主観的タイミング			合計
		遅い	平均	早い	
客観的タイミング	小 5	0	0	1	1
	小 6	0	1	3	4
	中 1	1	8	5	14
	中 2	2	11	3	16
	中 3	3	11	2	16
	高 1	10	8	5	23
	高 2	6	10	3	19
	高 3	5	3	0	8
	大 1	1	0	0	1
合計		28	52	22	102

Table 3．客観的タイミング と 早さ認知 のクロス表（女子）

		主観的タイミング			合計
		遅い	平均	早い	
客観的タイミング	小 4	0	1	19	20
	小 5	0	20	34	54
	小 6	4	33	15	52
	中 1	12	25	2	39
	中 2	17	6	1	24
	中 3	10	0	0	10
	高 1	2	0	0	2
合計		45	85	71	201

（2）身体変化の受容と発現タイミングの検討

タイミングによって身体変化の受容に違いが見られるかどうかを検討するため，タイミングを要因とした身体変化の受容についての一要因分散分析を行った（Table 4）。なお，第二次性徴の身体変化は，好ましいとされるものから嫌悪とされるものまで非常にばらつきがあり，個々の身体変化の特性には大きな違いがあると考えられるため，本研究ではそれぞれの身体変化を個別に検討を行った。

Table 4．　タイミングを要因とした身体変化の受容得点の分散分析結果

		遅い	平均	早い	全体	F 値	多重比較
男性（n=128）	変声	2.77（.92）	2.96（.94）	2.93（1.12）	2.90（.97）	.44	
	発毛	2.97（1.11）	2.39（.84）	2.29（1.15）	2.52（1.02）	4.84**	遅い＞平均，遅い＞早い
	筋肉がつく	4.12（.91）	3.99（.87）	3.64（1.13）	3.95（.95）	2.07	
	精通	3.24（.82）	3.09（.67）	2.93（.72）	3.09（.73）	1.38	
	全体平均	3.27（.98）	3.11（.07）	2.95（.11）	3.12（.58）	2.50	
女性（n=241）	胸が膨らむ	3.26（1.14）	3.28（1.02）	3.05（1.06）	3.20（1.06）	1.13	
	発毛	1.84（.76）	1.94（.83）	1.68（.75）	1.83（.80）	2.37	
	皮下脂肪がつく	1.84（.86）	1.78（.71）	1.69（.83）	1.76（.78）	0.58	
	初潮	2.40（.93）	2.43（1.14）	2.17（1.02）	2.34（1.06）	1.43	
	全体平均	2.33（.09）	2.36（.06）	2.15（.07）	2.28（.65）	2.51	

**：p<.01

各身体変化の受容の平均では，全体的に男性が女性より受容的であること，男性は筋肉がつくことについては非常に受容的であること，また女性は皮下脂肪がつくことについては否定的であることなどは，上長（2006）と同様の結果となった。発現タイミングによる違いについては，男性の発毛に対する受容のみに有意差がみられた（F（2,238）=4.84,p<.01)。さらに多重比較を行った結果，遅い群は平均群，早い群に比べ受容得点が高かった。この結果から，男性の発毛は他の身体変化よりも他者との違いが意識化されやすいものであることが示唆される。近年欧米では男性においても体毛がないことが魅力的である傾向が示されており（Basow and O'Neil, 2014)，本研究の結果は日本でも同様の傾向がみられるようになっている可能性が背景にあることが考えられる。

また，男子の全身体変化の受容得点の平均（SD）および女子の全身体変化の受容得点の平均（SD）は，それぞれ3.12（.58)，2.28（.65）であった。身体受容の性差を検定するために，この２得点について対応のあるｔ検定を行った結果，t(367)=12.58,p<.001となり，男子の方が有意に身体変化に対して受容的であった。この結果は，男性の方が女性よりも身体的変化を肯定的で受容しやすいのに対し，女性は否定的で受容しにくいという本研究の仮説を支持するものとなった。

さらに全体平均のタイミングにおける違いについての分析では，有意差はみられなかったものの，男女共に早熟の方が晩熟よりも身体変化の受容得点が低い傾向がみられた。この結果より，早熟な女子ほど身体的受容が低く，晩熟になるほど身体的受容が高くなるという仮説については，仮説を支持するまでには至らないものの，可能性は確認されたといえよう。しかし本研究の結果では，男子においても早熟であるほど身体的受容は低く，晩熟になるにしたがって受容が高まるという傾向が示された。この結果は上長（2007）の結果とは逆の傾向を示しており，仮説は支持されなかった。本研究では大学生に思春期の頃を回想して回答を求めている。そのため現在の身体受容が当時の身体変化の受容への解釈に反映されてしまっている可能性があり，それ故に仮説のような結果が得られなかった可能性は排除できない。しかし本結果より，男子も女子と同様，早熟群は他の男子と比較して自分が異質であるということを意識することにより，その意識が身体変化の受容を妨げている可能性が考えられる。さらに，たとえ肯定的なイメージを伴う身体的変容であっても，他の同世代の友人と異なるということは，身体変化の受容を妨げる要因となることも示唆された。この可能性は，仲間から異質な存在にみられることに対する不安に性差がみられなかったという高坂（2010）の研究からも裏づけられよう。

（３）発現タイミングと性別による対人的フィードバックの差の検討

対人的フィードバックが発現タイミングと性別により違いがあるかを検討するため，発現タイミング（晩熟群・平均群・早熟群）と性別を独立変数，対人的フィードバックを従属変数とした２要因の分散分析を行った（Table５）。

Table５．性別，タイミングによる対人的フィードバックの平均（SD）と分散分析の結果

	男子			女子			主効果		
	晩熟群 (n=34)	平均群 (n=66)	早熟群 (n=28)	晩熟群 (n=55)	平均群 (n=108)	早熟群 (n=78)	タイミング	性別	交互作用
対人フィードバック	21.32 (9.19)	22.05 (8.61)	18.71 (8.34)	21.27 (7.91)	22.12 (7.84)	24.90 (6.65)	0.27	5.08*	4.65*

**：p<.01,*：p<.05

分散分析の結果，有意な交互作用がみられたため（F（2,363）=4.65），単純主効果の検定を行った。その結果，女子において対人的フィードバックの単純主効果が有意（F（2,363 9 =4.14, p<.05）であり，早熟群が晩熟群よりも有意に対人的フィードバック得点が高かった。また早熟群において対人的フィードバックの単純主効果が有意（F（1,363）=12.51,p<.001）であり，男子よりも女子の方が対人的フィードバック得点が高かった。つまり，女子は早熟である方が対人的フィードバックを多く経験するのに対し，男子は早熟である方が対人的フィードバックの経験が少ないという結果となった。

この結果と発現タイミグと身体変化の受容との関連の結果から，女子においては早熟なほど対人的フィードバックを多く経験し身体的変化に対して受容しづらい傾向があり，男子は早熟なほど対人的フィードバックの経験が少なく身体的変化に対しての受容はしづらいという傾向がみられた。このことより，女子においては対人的フィードバックが身体的変化の受容に負の影響を及ぼし，男子は対人的フィードバックが身体的変化の受容に正の影響を及ぼす可能性を示唆していることが考えられる。

今後の課題

本研究では，大学生を対象に思春期の記憶を想起してもらう形式での調査であった。そのため，客観的タイミングは記憶が曖昧であったため，今回の分析対象から除かなければならなかった。また，他の項目についても過去の記憶に基づく回答であることから，精度が低くなってしまった可能性が考えられる。第二次性徴を迎える直前からの縦断研究により，よりリアリティのあるデータを得られるであろう。

本研究では，第二次性徴の発現タイミングと身体変化に対する受容，身体変化に対する他者からのフィードバックとの関連についての男女の違いの検討を試みた。その結果，男女ともに早熟なほど身体的変容に対して受容が難しく，晩熟なほど高い受容を示していることが明らかとなった。ちょうど思春期は，友人関係の発達における「チャム・グループ」に当たる時期であり，友人関係に同質性を求め異質性を排除する特徴をもった友人関係を形成する。そのため，他の仲間よりも早くに身体的変化を経験する早熟群は，異質なものとして扱われるという不安を生じさせることにつながるのではないだろうか。また，周囲も成熟の早い友人を異質とみなし，否定的なフィードバックを与えてしまう可能性があるのではないだろうか。このように青年期独特の友人関係の持ち方が，身体的変化の上に大きな影響を及ぼしていることが考えられる。つまり第二次性徴を迎えた青年の混乱や動揺は，その青年の友人関係のあり方によって軽減されたり増幅されたりする可能性があるのではないかと考える。

本研究では第二次性徴に伴う体験や認知のみに焦点を充てており，この体験や認知が思春期の友人関係や対人行動などへ及ぼす影響については検討されなかった。しかし，第二次性徴が及ぼす影響について検討する際には，思春期独特の心理的特徴を考慮した上で，友人関係の特徴，そして個人が形成している友人関係の質などを複合的に捉えることで，より力動的な特徴が明らかになっていくであろう。

引用文献

Basow,S.A. and O'Neil,K. 2014 Men's Body Depilation：An Exploratory Study of U.S. College Students' Preferences, Attitudes, and Practices. Body Image 11, 1-34.

Blyth,D.A., Simmons, R. G., Bu;croft, R., Felt, D., Vancleave, E. F. and Bush, D. M. 1981 The effects of psysical development on self-image and satisfaction with body-image for early adolescent males. Research in Community and Mental Health 2, 43-73.

Brooks-Gunn, J., Peterson, A. C. and Eichorn, D. 1985 The study of maturational timing effect in adolescence. Journal of Youth and Adolescence 14, 149-161

伊藤裕子　2001　青年期女子の性同一性の発達－自尊感情，身体満足度との関連から－　教育心理学研究　49，458-468.

梶田叡一　1980　自己意識の心理学　東京大学出版会

高坂康雅　2010　青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向　教育心理学研究　58，338-347.

向井隆代　2010　思春期の身体的発達と心理適応－発達段階および発達タイミングとの関連－　カウンセリング研究　43，202-211.

Paikoff,R.L. and Brooks-Gunn,J. 1990 Psychological processes：What role do they play during the transition to adolescence?　Montemyor, R., Sdams, GR. And Gullotta, T. P.（Eds.）From childhood to adolescence：A transitional period. Newbury Park, CA：Sage. 63-84

齊藤誠一　1985　思春期の身体発育と性役割意識の形成について　教育心理学研究　33，336-344.

上長然　2007　思春期の身体発育のタイミングと抑うつ傾向　教育心理学研究　55，370-381.

上長然・斎藤誠一　2011　思春期の身体発育が攻撃性に及ぼす影響　青年心理学研究　23，133-176.

浦上涼子・小島弥生・沢宮容子　2015　メディアの利用と痩身理想の内在化との関係　教育心理学研究　63，309-322.